

（姉崎の弟子であり帰一協会会員でもあった）旧蔵遺品の中に、昭和一四年三月までの『紀要』が含まれている。これを参照すれば、本書巻末付録では昭和八年で途切れている月例会記録をより充実させることができたであろう。いまだ行方知れずの『帰一協会会報』の欠号など、この類いの散逸史料は国内外にまだまだ眠っていると思われるので、引き続きの蒐集と保存、公開を期待したい。他にも、『帰一協会叢書』全十巻や、小冊子『時局論叢』全三冊など、活字となった出版物の成り立ち等についても、これまでに研究されてこなかった。自分がそれをしていまま、からめ手から攻略する前にまずは正政法を尽くすべきなのではないか、という不満を述べるのは無責任なことであるとは承知しつつ、未来の帰一協会研究に期待して筆をおきたい。

（東北大学教授）

赤澤史朗、北河賢三、黒川みどり、戸邊秀明編著
『触発する歴史学——鹿野思想史と向きあう』

（日本経済評論社・二〇一七年）

萩野 富士夫

一 鹿野史学に一貫するもの、転回するもの

「戦後歴史学の第二世代」として一九六〇年代に民衆思想史を確立した鹿野政直は、現在に至るまで「近代」「民衆」「国家」、そして「日本」のありようを内在的に論じつづけてきた。その多彩かつ膨大な著述と社会的な発言・行動は歴史研究者にとどまらず、多くの人びとに新たな問題領域の所在を示すとともに、それらの解決に立ち向かった「個性」の強靱で独創的な思索と行動を通して変革への希望を指し示してきた。文字通りの「触発する歴史学」を体現する存在でありながらも、個々の領域での評価や批判とは別に、その半世紀以上におよぶ鹿野史学総体の本格的な検証はこれまでなされてこなかった。

この未踏の課題に日本現代思想史研究会の参加者らが共同研究として取り組んだ成果が、本書となった。黒川みどり「鹿野思想史と向きあう」を序説とし、第一部「鹿野思想史の成立と方法」は三つの論文、第二部「鹿野思想史の焦点／その問題

群」は六つの論文で構成される。全体を通して「鹿野思想史に立ち返ることは、我々による今日の歴史学の自己点検となろう」（黒川「序説」）というスタンスに立ち、鹿野史学の「根底にある「広く歴史学批判の構え」（戸邊「あとがき」）を明らかにしようとした。また、「読み手を魅きつけ心に食い入る」（黒川）、すなわち「触発される瞬間に現れる作用」（戸邊）が、それぞれの執筆者にとってどのようなものであり、何を学びとったのが省察される。本書の特徴は、鹿野の著作を史学史的な位置づけから離れて「一箇の『作品』（戸邊）として読み解こうとしている点にあり、その「作品」への愛着と敬意がうかがえる。

「これほどまで腑分けされてしまつて」という鹿野の呟きが聞こえてきそうなほど、本書では鹿野史学の形成と展開の過程および特徴が精密に深奥まで解析されており、同時代の社会状況や歴史認識と全力で対峙したことが浮かび上がるとともに、あらゆるものに思想性を読み込み、それらを表現する文章の喚起力や破壊力にあらためて圧倒される。

「鹿野思想史の成立過程」を概観する黒川「序説」は、「鹿野にとつて「近代」と向き合うことはとりもなおさず「国家」と対決すること」であり、「戦後歴史学のみならず、国民国家論におけるナショナリズムの問題や社会史、マイノリティー研究などにも問いを投げかけてきた」とする。「戦後歴史学からの離脱」と「主体としての「民衆」像の提示」を志向していく一

九七〇年前後を、鹿野思想史の成立とみる。また、黒川は第一部の「鹿野思想史と丸山政治思想史」において、福沢諭吉との対決を通じて鹿野が丸山眞男から離脱していく過程を丹念に描いている。

北河「触発する歴史学——鹿野思想史の特徴と性格について」は、鹿野の文章に「いわば全身で對手を受け止め応答しようとする姿勢と、そこに込められた著者の想い（敬愛と共感）」を読みとつたうえで、「思想が発酵する場としての『文学』」に注目して、「個性たち」や民衆の思想に向き合い、その思想を時代とのかかわりのなかで見定めようとする「思想史学」とする。この位置づけは、鹿野史学の「触発」性を的確に言い当てている。

『資本主義形成期の秩序意識』に即して「前期鹿野思想史学の確立過程」を追った戸邊は、「変革主体を検出して「いかに解放されてきたか」を語るばかりでなく、「いかにとらえられているか」という視点」から歴史を見ること」を鹿野史学に一貫するものとみる。一方で、色川大吉による批判や一九六〇年代前半に噴出した社会矛盾と向き合うなかで、「鹿野は西洋や発展段階を基準にした近代日本の歪みや遅れではなく、近代それ自体が生み出す問題を直視するようにな」つたとして、後期鹿野思想史で「開花する要素」、すなわち「めざされた近代」から「嵌めこまれた近代」への転換、そして「公事」から「私事」への転回が予測される。なお、戸邊が『秩序意識』への体

系化過程を仔細に検討するなかで、「初出論文にはあった問題関心の表明や研究史の批判等の文脈」が抜け落ちたことに言及し、その初出論文の「固有の意義」がなくなっていないとする点は傾聴に値する。

二 「実践性」「戦闘性」への収斂

各論となる第二部の論文を通じて、「触発」性という点に注目すると、鹿野史学の特徴は総じて「実践性」や「戦闘性」に収斂していくと捉えられている。黒川「序説」で「鹿野は、あらゆる場に成立する『権威』に抗うことを求め、『うちなる奴隷性』を見つめ、疎外されている人びとの声を拾い上げ、日本の現実的な問題に『正対』してきた研究者である」と指摘されていることが、各論において具体的に検証された。

小林瑞乃「個性のふるまい」をめぐってでは、「『人生』のための歴史学、『希望』のための歴史学」とすると同時に、「『個』」「『生』」の圧伏への拒否の精神は、現代社会の病理をも照射する」とその「実践性」を指摘する。上田美和「呪詛される近代」では、現在こそ「鹿野が解明した反近代の論理を、再び参照することの意味が大きくなっている」として、鹿野民衆思想史を「反近代」と「正対するための光源」として意義づける。

鹿野『現代日本女性史』の内在的な分析を試みた和田悠「鹿野女性史の視角」は、鹿野の「屹立する精神」に触発されたと

して、その女性論の現代性を「日本を戦争のできる国にする」とを課題とし、性差別を利用して国民動員を行おうとする同時代の支配体制への根源的な批判となっている」ことに見出した。鹿野『健康観にみる近代』に「一九八〇年代から九〇年代にかけて顕著になった時代状況」の色濃い投影をみる高岡裕之「思想史の場としての『健康』」も、近年のポピュリズムの台頭や「国家」が「健康」管理を強める状況に対する「鹿野の『近代』への向きあい方」はさらに重要な意味を持ってきたとする。

「沖繩を通じて自己の思想史研究を更新し続ける鹿野の思考の現在」を探究した戸邊「いのちの思想史の方へ」は、「民衆思想の根源を『いのちの思想』と捉える鹿野の方法的構えがさらに確かなものとなつた」とするとともに、「国家や社会が押しつける秩序を相対化したり、組み替えたりして別個の制度や秩序を構想する想像力にあらためて希望を見いだしている」と観測する。この理解は後期鹿野史学の現在位置を示しており、学ぶところが多かった。

赤澤「『兵士論』とその問題点」と小沢節子「鹿野政直『浜田知明論』の深度と射程」は、ともに自身の関心に引きつけて「兵士論」と「浜田論」の深化を図ったといえる。前者は鹿野兵士論では「兵士たちの戦後の生き方から振り返った『戦争体験』とその変化が、十分究明されていない」と批判する。浜田「風景」などに「日本軍の加害」が描かれたことについて、「シユールレアリズムのもつ独自の可能性を示す」という指摘は興

味深い。

小沢は、銅版画の技法などにおよぶ鹿野の浜田論について、「思想の全容を理解するとは思惟方法・思惟過程を含めて考察すること」という鹿野思想史の立場の貫徹をみる。さらに「鹿野自身の経験と共振させながら、日本軍兵士だった作家の精神構造と戦後日本への異議申立てを絵の中に読み解き、絵画から照り返されるようにして言葉を紡ぎ出していく」姿勢に共感すること、¹「歴史家が絵画を読む」意味を探り求めた。

三 鹿野史学における通史的著作の「触発」性

私自身も鹿野史学から大きく「触発」された一人ながら、その「触発」の内実に正対することを怠ってきた。本書はおよそ六〇年におよぶ鹿野史学について再認識を迫るとともに、いくつかの新たな知見を与えてくれる。その達成への労に敬意を表した上で、二つの注文を付したい。

一つは、後期と呼ぶ一九七〇年前後から現在に至る鹿野史学が、どのように内在的要因と外在的要因によって展開されてきたのかを、より太い線で提示してほしかったということである。序説と第一部北河論文での言及はあるとはいえ、第二部の「問題群」は原則的に個々の「問題」の集成にとどまっている。それらが「群」として、時間的に、論理的にどのような流れで生成・配置されてきたのかについて、研究会の共同研究として、および本書の編集過程において、やはり検証・論議すべきであ

った。

「近代」観の転換と「私事」を出発点とする転回からの鹿野史学は四十年余を闊しており、それを後期思想史と一括するのはやや無理であろう。『鹿野政直思想史論集』刊行後は沖繩に焦点を絞りつつ、福島や憲法改悪阻止などの「国家」との対抗に力を注いでいるので、それ以前の第二部「問題群」の三十年余が検証される必要がある。たとえば三十年余を二分、ないし三分して、新たな「問題」がどのように次々と繰りだされ、どのような相互連関と発展の關係にあったのか、知りたいと思う。社会史への応答として健康観の領域が浮上した段階、そして鹿野の近代史研究の出発点である「軍隊」の問題に「兵士論」の視角から立ち返った段階が、その画期といえようか。

個人的な体験で恐縮だが、主に七〇年代後半の大学院ゼミに連なるなか、ゼミ室や喫茶店での雑談で、鹿野から中山千夏『からだノート』（一九七七年）や灰谷健次郎『菟の眼』（一九七四年）・『太陽の子』（一九七八年）などの読後感が語られたことを思い出す。その後しばらくして、女性・差別・沖縄などを主題とする著作が刊行され、ゼミ生たちはあの時の話題が、と気がつくのだった。当然ながら、ある主題が著作として出現する前には長い醸成の時間があり、その間には主題周辺の事象の博搜が重ねられたはずで、先のエピソードはその一端だった。また、新聞の書評を担当された際、克復・対峙しなければならぬ本もあるという決意を漏らされたことがあり、権力・権威へ

の強烈な意志の発露として記憶に残った。

私にとって鹿野史学との出会いは『日本近代史——黒船から敗戦まで』（西岡虎之助との共著、一九七一年、実際の執筆はほぼ一九六四年まで）であった。単なる歴史好きで文学部史学科を志望し、分らないなりに古代史から近代史の専門書に手を伸ばすなかで、文学や伝記・記録などによって描かれる「人びとの生活と心情の歴史」（共著者の一人によるあとがき）というものがありうるのだという驚きと面白さですぐに近代史に引き寄せられた。それは「小文字」の側から「大文字」をみる」（『歴史を学ぶこと』九八年）という鹿野史学に「触発」された瞬間だった。

その後、第二部「問題群」の領域に接するたびに驚嘆し「触発」されてきたが、私をもっとも鹿野史学に親しみ、多大な教えを享受したのは、本書が対象とする『思想史論集』には収録されなかった一般向けといつてよい通史的著作の数々——『明治の思想』（一九六四年）から『日本近代史』を挟み、『近代の日本』（ジュニア版、七八年）、『近代日本思想案内』（九四年）、『日本の現代』（ジュニア新書、二〇〇〇年）、『日本の近代思想』（〇一年）、『近代国家を構想した思想家たち』、『近代社会と格闘した思想家たち』（ジュニア新書、〇五年）——であった。この系譜に『大正デモクラシー』（七六年）や『祖母・母・娘の時代』（八五年）、『歴史を学ぶこと』も加えるべきかもしれない。

したがって、二つ目の注文は書評の範囲を逸脱するが、鹿野史学の「触発」性を通史的著作のなかにも探究してほしかったということになる。これらにはいずれも平易ながら複層的な文章により「近代」「民衆」「国家」「日本」などの格闘ぶりが盛り込まれるだけでなく、通史的叙述そのものを大切にする姿勢が貫かれていた。『近代国家を構想した思想家たち』刊行時のインタビュー（『朝日新聞』二〇〇五年七月三一日）で、「一般教育」の授業をより志向する理由として「研究成果を伝えるより、受講生がもう少し人生と向き合えるようになれば」と語っているが、これは意識的に通史的著作を社会に届けようとする姿勢とつながっている。「一般教育」を担当してきた私には、到達しがたいながらも、この「もう少し人生と向き合える」ための、より住みやすい社会を希求する歴史学はめざすべき目標でありつづけた。

再び個人的記憶をたどれば、学部三年の近代史講義の際に遠山茂樹『明治維新』（一九五一年）に言及し、その簡潔で凝縮された本文の背後にある膨大な史料と研究の蓄積について語られたことがある。ゼミのテキストは『自由党史』や『原敬日記』だった。現在でも『昭和天皇実録』を熟読されているようである。また、政治史・経済史が王道であり、思想史は脇道という述懐も折にふれてなされた。諧謔的な表現とはいえ、学生らに対する政治史・経済史をしつかり学びなさいというメッセージであり、鹿野自身にとってもそれを肝に銘じるところがあった

ように推測する。鹿野にとって政治史・経済史を基軸とする日本近現代史の通史的叙述を試みることは、とりわけ『近代』や『国家』を考えるうえで重要と理解されているのではないか。

深沢七郎『笛吹川』のような日本通史をめざした『日本近代史』では、「歴史における表面上のできごとつまり政治的諸事件などは抽象的に」、「人びとの生活と心情の歴史」（『共著者の一人によるあとがき』）は具体的に書こうと努めたという。シリーズの一冊としてもされた『大正デモクラシー』では、「当時の人々が向かいあったところの国家の構造・支配の実態をも、できるだけあきらかにしたい」としたうえで、それらの分野の叙述に「思想的・視点」を組み込みたいとする。ジュニア版『近代の日本』で基軸に据えたのは、「民主主義が、どんなふうに達成されようとし、また達成されなかったか」という点と「たびたびおきた戦争の意味を考える」ことである。なお、同書では四六都道府県の具体事例を網羅するという手法をとって、「地域」への視点が重視されている。『日本の現代』においては、「経済大国」という枠組」と「日米関係という枠組」を骨格とし、その枠組の「揺らぎ、転換と再編」を通して二〇世紀末の時点で「日本はどこへ」という総括がなされた。

『近代日本思想案内』の「はじめに」では「思想と向きあう」意味が、『近代国家を構想した思想家たち』のプロローグでは「わたくしにとってなぜ思想史だったのか」が、『近代社会と格闘した思想家たち』のプロローグでは「私事は歴史にならない

か」という、鹿野史学の本質に連なるキー概念が集約されている。また、『思想案内』の末尾に「思想の環境を知るため」として「言論法規」を付していることも、思想を「国家」や権力との緊張関係で捉える鹿野の本領である。

いうまでもなく、こうした通史的著作は近現代史の「全体」を対象とするものであり、政治・経済から文化、生活までを先のような基軸をもとに論述することは、それぞれを相対化して把握する必要がある。鹿野史学にとって数度におよぶ通史的著作の試みは、『近代』や『民衆』と格闘するなかでつかみ得たものを反映させる場ともなった。それゆえにこそ、通史的著作のなかに大きな「触発」源が埋め込まれたといえる。

（小樽商科大学名誉教授）